



TITLE:

<書評>中川加奈子著『ネパールで
カーストを生きぬく -- 供犠と肉売
りを担う人びとの民族誌』世界思
想社、2016年、5,800円＋税、
312頁

AUTHOR(S):

上杉, 妙子

CITATION:

上杉, 妙子. <書評>中川加奈子著『ネパールでカーストを生きぬく -- 供犠と肉売りを担う人びとの民族誌』世界思想社、2016年、5,800円＋税、312頁. コンタクト・ゾーン 2017, 9(2017): 453-456

ISSUE DATE:

2017-12-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/228341>

RIGHT:

Contact Zone 2017 書評

中川加奈子著

『ネパールでカーストを生きぬく ——供犠と肉売りを担う人びとの民族誌』

世界思想社、2016年、5,800円＋税、312頁

上杉妙子

本書は、食肉屠畜を生業とするカドギ・カーストの人々が、ネパールの民主化と食肉流通の市場化という変動期にあつて、祖伝の知識と技術を活用して経済力をつけ、自らのカーストの社会的威信を高めていく過程を描く民族誌である。なお、カドギとは、ネパールの首都カトマンズを故地とする民族ネワールに所属するカーストの一つである。本書の出版により、カースト差別の対象となってきた人々がそれを克服していく実践について、詳しく知ることができることとなったのは、誠に喜ばしい。

本書の構成は以下の通りである。

まず「序章 カーストとして生きる／個人を生きる」では、本書の目的と分析視角を提示する。次いで「第1部 肉売りカーストという役割」は第1-3章から構成される。「第1章 交わされる財とサービス——ネワールのカースト間関係」では、ネワールのカースト制度の概要を明らかにする。「第2章 暮らしを支える共同性——親族関係と生活組織」では、カドギの親族組織や集住地、生業などについて述べる。「第3章 カースト役割と個人の信仰世界の交差」では、カドギ・カーストの儀礼的役割や信仰世界について明らかにする。

「第2部 食肉市場の形成とカースト役割」は第4-7章から構成される。「第4章 生活の場の重層性——カースト役割と市場取引」は市場経済の浸透の結果として、食肉の屠殺・加工・流通に伴う社会関係が今や、儀礼的な関係にとどまらず、市場経済の一部となったと指摘する。「第5章 食肉市場の形成とカースト間関係の変容」では、カドギのカースト団体であるネパール・カドギ・セワ・サミティ（NKSS）に焦点を当てる。NKSSは、他のカーストや民族も参入しつつある食肉市場においてカドギの優位性を維持するとともに、カドギ・カーストの社会的威信を高めるべく、取り組みを進めているという。「第6章 食肉のカースト社会からの離床」では食肉加工・流通業の変容を取り上げる。かつてカドギ・カーストの集住地において職住一体型で営まれていた肉屋が、今で

453

は、冷蔵庫が設置可能な市営のバザール、そしてスーパー・マーケットの一角へと移転し、国内・国際市場の一部へと組み込まれつつあるという。「第7章 供物としての肉から商品としての肉へ」は、カドギ・カーストの儀礼的な役割の組み換えについて明らかにする。彼らは人の誕生や葬送の際に果たすカースト役割が差別につながるとして、それを拒否している。その一方で、旧王宮でまつられるタレジュ女神の祭礼には参加し、「タレジュのセキュリティ・ガード」としてのカースト役割を積極的に果たす。彼らは自らのカーストの社会的威信を上昇させようともくろんでいるのである。

「第3部 国家的変動への下からの接続」は第8章と第9章、終章から構成される。「第8章 カースト・イメージの読み替え」では、カドギ・カーストが、自らはダリット（不可触民）ではなく先住民ネワールの一員であるとして、カーストの再定義を試みていることを明らかにする。彼らはアフーマティブ・アクションにより様々な特典を引き出すことよりも、誇りと社会的威信を取り戻すことを選んだのである。「第9章 交錯する関係性とその操作」では、カドギのカースト団体である NKSS の活動の変遷に焦点を当てる。NKSS は、カースト差別に異を唱えるために、国際赤十字と連携して献血事業をしたこともあったという。「終章 下からのカーストの再創造」では、南アジア地域研究とスティグマについての人類学的研究における本書の位置づけを明らかにする。

カドギたちの実践を描く著者の筆致はきめ細かい。そのため、「地域においてある程度共有されたいわば埋め込まれた役割としての存在論的カースト」と「個々人が実践する断片化された行為としての行為論的カースト」とが相互に補完しあうなかで生じる「具体的な社会配置の組み換え」を、「下からのカーストの再創造の動態として捉える視座に立つて記述する」という本書の狙いは十分に達成されている。たとえば、水牛の解体の描写を見てみよう。水牛の血液が滴りその体臭が充満していたであろう場面にあつて、著者は生き物の死を冷徹に突き放してみるのではなく、かといって過剰に感傷的になるのでもなく、詳しくかつ手際よく記述する。それにより、カドギが世代から世代へと継承してきた屠畜の技能や知識の重みと、現代の食肉市場におけるその有用性、そしてカドギたちの戦略の巧妙さが印象付けられることとなった。

ところで、評者の見るところでは、本書は少なくとも四つのストーリー・ラインが交錯する民族誌であり、複線的な読み方をすることが可能である。そのことは、社会変化の民族誌としての豊饒さと奥行きを本書に与えている。四つのストーリー・ラインとは何か。

一つは、カーストの生業ゆえに差別の対象となってきた人々が自らのカーストを再定義し社会的威信を高めていくというストーリー・ラインである。二つ目は、彼らが食肉の屠畜・加工・流通産業の近代化に適応して経済力をつけていくというストーリー・ラインである。いうまでもなく、この二つは、本書の主軸をなすストーリー・ラインである。

それだけではない。本書は、政体変革期のネパール社会の行方にも関わる第三と第四のストーリー・ラインを追跡しつつ読むことも可能である。それは何か。

まず、第三のストーリー・ラインとは、民主化後のネパールにおける市民社会の伸長である。ここでいう「市民社会」とは、18世紀西欧社会において出現した、私的生活と公的権威との間の新しい領域である [Goody 2001]。しかし、市民社会は今では、西欧社会

のみならず、非西欧社会を近代化ないし民主化する際の規範的概念として、あるいは、非西欧社会の市民団体 (civil society organization) や社会政治的实践を記述するための分析的概念として、用いられるようになっていく¹。その伝でいうと、NKSS も民主化後のネパールにおいて伸長しつつある市民団体の一つにほかならない。カースト差別に抗する NKSS の活動は、あるべき市民社会についての人々の社会的想像の一端をうかがわせるものであり、その動向は極めて興味深い。

次に、第四のストーリー・ラインとは、政府とカドギ・カーストの関係の変容である。ネパールがヒンドゥー王国であったころ、殺生をしてはいけないとされる月回りに肉の販売をしていると、逮捕されたという (248 頁: 以下、本書からの引用頁は数字のみ記す)。また、民主化以前には、政治団体としてみなされ弾圧の対象とならないように、NKSS も社会奉仕団体として活動をしていた。しかし、数次の民主化運動を経て言論の自由が確立、ネパールが世俗国家となると、宗教や政治性を理由とした弾圧はなくなった。それどころか政府は、動物の権利に配慮した屠畜のし方や衛生改善のための指導、設備の供与を行い、食肉産業の近代化を支援している (154-158)。政府のこのような指導と支援に積極的に対応しているのが、カドギ・カーストが中心となって運営する食肉協同組合である。ここに、現代ネパールにおけるコーポラティズム (corporatism) の展開を見ることができるとはいえないか。コーポラティズムとは、国家発展を達成するという目的のもとに、主要な社会集団や利益集団が時には同種の団体を統轄する形で、あるいは国家の指導と監督、統制のもとに、政府の制度に統合される体制である [Wiarda 1997: ix]。仮に、政府と食肉協同組合のような業界団体との関係がコーポラティズム的なものに成長していくのであれば、そのことは、ネパールにおける民主化の道筋や市民社会の成長を方向づけていくこととなろう。

本書は、カドギが巧みに生き抜く姿が「スティグマから逆に生の肯定の拠点を創り出すための道筋を照らし出している」とすることばで、閉じられている。彼らの生業はカースト差別と結びついたものであったが、その一方で、市場経済に参入するために必要な知識と技能を彼らに与えるものでもあった。しかし、指をくわえて社会変容を眺めているだけでは、カドギたちは自らの社会的・経済的地位の向上のために先祖伝来の技能と知識を生かすことはできなかったであろう²。彼らは知恵を働かせて機会をものにしたのである。のみならず、彼らの動向は、ネパールの民主化や市民社会の伸長の一翼を担うものでもあった。被差別カーストの人々によるこのような実践は、多くの人々に勇気を与えることであろう。何となれば、人は誰しも何らかのスティグマを背負った存在なのだから。

1 例えば、コマロフ夫妻が編集した論文集 [Comaroff & Comaroff eds. 1999] は、その視点から編まれたものである。

2 著者が押川文子の研究を引用して述べるように、すべての被差別カーストが、伝来の生業を活用して市場化や近代化に適応することに成功しているというわけではない (272)。

< 参考文献 >

- Comaroff, John L. & Jean Comaroff eds. 1999 *Civil Society and the Political Imagination in Africa: Critical Perspectives*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Goody, Jack 2001 Civil Society in an Extra-European Perspective. In Sudipta Kaviraj & Sunil Khilnani eds. *Civil Society: History and Possibilities*. Cambridge: Cambridge University Press, pp.149-164.
- Wiarda, Howard J. 1997 *Corporatism and Comparative Politics: The Other Great "Ism."* London: Routledge.